

三重大学新任教員ハンドブック

「4つの力」教育への招待



三重大学高等教育創造開発センター
Higher Education Development Center (HEDC)

表1 「4つの力」の構成要素

<p>「感じる力」とは、態度、志向性など、人の情意的領域に関する能力である。具体的には、</p> <ul style="list-style-type: none"> 感性：対象世界との身体的・直接的な出会いを通じて、対象をその多様性において受け止めるとともに、それを契機として創造的な諸活動を展開することができる。 共感：人を思いやり、人のために行動することができる。また、人の考えをよく理解し、受け容れて、協力して仕事に取り組むことができる。 倫理観：自己の良心と社会の規範やルールに従って行動できる。 モチベーション：ものごとの必要性・重要性を理解して、行動の目標や達成すべき目標を掲げ、意欲的に取り組むことができる。 主体的学習力：生涯にわたって学ぶことの必要性をよく理解して、主体的に学習することができる。 心身の健康に対する意識：心身の健康の維持・増進を意識して、適切に運動や行動を行うことができる。
<p>「考える力」とは、知識・理解など、人の認知的領域に関する能力である。具体的には、</p> <ul style="list-style-type: none"> 幅広い教養：学問の基礎をよく理解し、これを特定の分野だけでなく、幅広い分野に活用することができる。 専門知識・技術：各学部固有の領域に関わる知識・技術を有し、その領域における専門職業人となることができる。 論理的思考力：ものごとや情報を論理的に分析し、理解できる。 批判的思考力：ものごとを見聞きしたままに受け取るのではなく、客観的かつ分析的に理解することができる。 課題探求力：自ら取り組むべき課題を見出すとともに、その課題に取り組む方法を考え、探求することができる。 問題解決力：所与の問題を自らの課題として責任をもって受け止め、期限内に解決できる。
<p>「コミュニケーション力」とは、他人との相互理解を支えるスキル、他人に対する態度、志向性など、対人関係を前提とした情意的・認知的領域に関する能力である。すなわち、</p> <ul style="list-style-type: none"> 情報受発信力：図書館、講義、講演、インターネットなどから、情報通信技術等を用いて効果的・効率的に情報を収集し、的確に分析・判断することができる（情報受信力）。さらに、モラルをもって受け取った情報を活用して価値ある情報を生み出し、これを他者に向けて効果的に発信することができる（情報発信力）。 討論・対話力：討論に際しては、課題に対する賛成論者または反対論者として議論でき、あるいは聴衆として議論の是非を公正に判断することができる（討論力）。対話に際しては、相手の意見を傾聴して、理解を深めることができる（対話力）。 指導力・協調性：他者と協調・協働して行動できる（協調性）。また、他者に進むべき道を示し、目標の実現のために総意を結集し、他者を導くことができる（指導力）。 社会人としての態度：社会の一員としての意識を持って、権利と義務を正しく行使し社会の発展のために積極的に関与できる。 実践外国語力：特定の外国語を用いて、読み、書き、聞き、話すことができる。
<p>「生きる力」とは、「感じる力」、「考える力」、「コミュニケーション力」、それらを総合した力である。</p> <p>例えば、自らの使命と責任をよく認識して、知識・技能を深め、活用するとともに、人々と協力し、人々を導いて、課題を解決していく能力があげられる。</p>

三重大学に着任された教員の皆様へ

このハンドブックは、三重大学に新たに赴任された教員、特に教職経験が比較的浅い教員を主な対象として、三重大学の教育に関する要点をまとめ、教育活動に役立てていただく事を目的としています。

大学教員は多くの場合、大学院を経て教職に就きます。大学院では主として研究に従事し、研究者としてのトレーニングを受けますが、教育者としてのトレーニングを受けることなく、いきなり現場に教員として飛び込むことが稀ではありません。私自身がそうであり、赴任直後の頃を思い起こすと冷や汗が出る思いをすることがあります。学修の「1単位」の定義を知ったのは、赴任後1、2年後でした。

大学が「エリート段階」にあり、大学での教育が研究者や専門家の養成が主目的である場合は、学生は教員のいわば後輩であり、教員は研究者として努力する背中を学生に見せていれば充分でしたが、そういう時代はすでに遠くなり、現在ではプロの教育者としての役割が強く求められています。

本書は、学歴や職歴などのキャリアと大学で求められる役割に依然として何らかのギャップがある場合を想定し、そのギャップをいささかなりとも埋め、新たに三重大学に赴任された先生方が、本学での教育活動をスムーズに開始されることを願ってまとめました。一読の上、折に触れて活用していただければ幸いです。

三重大学教育担当理事
高等教育創造開発センター長

田中晶善

目次

三重大大学に着任された教員の皆様へ

田中 晶善

I. 三重大大学の教育目標：「4つの力」の育成

1. 「4つの力」とは 守山紗弥加・・・1
2. 「4つの力」の育成を保障する3つのポリシー 下村 智子・・・2
3. 「4つの力」育成のための授業：
「4つの力」スタートアップセミナー 長濱 文与・・・4

II. 「4つの力」を育成するための授業と学生指導

1. 授業のデザイン 中川 正・・・6
2. シラバスの作成 中西 良文・・・8
3. PBLの活用 山田 康彦・・・11
4. 授業改善のための研修会（FD）と
リソースの活用 高山 進・・・14
5. きめ細かな学生指導 鈴木英一郎・・・16

III. 「4つの力」を確認する評価システム

1. 三重大大学の授業評価 南 学・・・18
2. 三重大大学の教育改善活動 中島 誠・・・20

IV. 「4つの力」を鍛える学習支援システム

1. 三重大大学 Moodle 奥村 晴彦・・・24
2. 三重大大学 eポートフォリオ 森尾 吉成・・・28

I. 三重大大学の教育目標：「4つの力」の育成

2014年度からの国立大学法人化に伴い、各大学において中期目標・計画に基づくカリキュラムの策定が進められました。それに応じて、大学の個性化・特色化も進展してきました。中でも大学全体としての教育目標においては、教養教育・専門教育の総合的な充実を目指す新たな学士像が打ち出されるようになりました。グローバル化する知識基盤社会において学士の資質能力そのものが問われる中、複雑化する現代社会にも対応できるよう、異・多分野との連携を図りながら活躍する人材の育成が求められるようになってきたことから、専門的知識・技術の育成だけでなく分野を超えた汎用的能力の獲得が叫ばれています。

そのような状況を熟慮し、三重大大学では以下の教育目標を掲げています。

幅広い教養の基盤に立った高度な専門知識や技術を有し、地域のイノベーションを推進できる人財を育成するために、「4つの力」、すなわち「感じる力」、「考える力」、「コミュニケーション力」、それらを総合した「生きる力」を養成する。

当目標は「人と自然の調和・共生」を大切にしながら、地域に根ざし、世界に誇れる独自性豊かな教育・研究成果を生み出すべく、学術文化の受・発信拠点となることを目指すものです。それらを「4つの力」として示すことで、目標内容の多元的理解や具体的な養成イメージを可能にしています。この「4つの力」の養成は、社会の新しい進歩を促す様々な力量を育てるものであると同時に、他者に対する寛容と奉仕の心を併せもった感性豊かな人材の育成を念頭においていることも特徴です。

以下では、(1)「4つの力」とは (2)「4つの力」の育成を保証する3つのポリシー(3)「4つの力」育成のための授業：「4つの力」スタートアップセミナー についてご紹介します。

1. 「4つの力」とは

三重大大学が養成を目指す「4つの力」は、総合力としての「生きる力」のボックスの中に、「感じる力」、「考える力」、「コミュニケーション力」が含まれているイメージとして表現されます(図1)。各々の力の定義に関しては、表1(表紙裏)を参照してください。



図1 「4つの力」のイメージ

これらは三重大大学の学士課程教育を通して到達すべき目標であると同時に、卒業後の社会で地域のイノベーションを率先して推進できる人材育成に寄与する汎用的能力でもあります。先述したように、「4つの力」およびその下位要素として定義される種々の力は、「学士力」(中央教育審議会, 2008)や「社会人基礎力」(経済産業省, 2006)とも対応しており、現代社会を生き抜くために学士課程教育において身につけることが求められる重要な能力群です。学生がそのような「4つの力」を意識して三重大大学での学びをスタートできること、さらに、大学生活の様々な場面において意識し続けながら理解を深め、その成長や獲得を実感できるよう願われているものでもあります。つまり、大学教育の全体を通して発達し、行動の総体として発揮されるものであると言えるでしょう。

本学における教育・研究においては、まず各教員が「4つの力」に対する理解を深め、その上で、それらの要素を柔軟な視点で授業や学生教育に活かすべく取り組むことが期待されます。

2. 「4つの力」の育成を保證する3つのポリシー

(1)日本の高等教育の質保証と3つのポリシー

近年、グローバル化する知識基盤社会において、資質能力を備える人材育成は重要な課題として認識されるようになってきました。大学においては、その国際的通用性への対応、高等教育のユニバーサル化による学習者の量的拡大・質的変容、大学の説明責任に対する要請など、わが国における高等教育をめぐる環境は急速に変化しています。このような国際的通用性の確保や国内における人材育成などの社会的要請に応えるため、大学には教育の質を維持・向上させるとともに、その質の保証が求められるようになってきました。

このような背景のもと、中央教育審議会は、2008年12月に答申「学士課程教育の構築に向けて」を発表し、「アドミッション」、「カリキュラム」、「ディプロマ」という観点に基づく3つのポリシーを明確化することにより、学士課程教育の充実と質の保証のための具体的取組みを提言しました。この3つのポリシーは、学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー、以下DPと略記)、教育課程編成・実施の方針(カリキュラム・ポリシー、以下CPと略記)、そして入学者受け入れの方針(アドミッション・ポリシー、以下APと略記)で構成されています。DPは、学部や学科が教育活動の成果として学生の卒業時に保証する最低限の基本的資質を示したものです。CPは、教育課程がDPで示された基本的資質を育成する体系性と整合性を担保していることを保証するものです。そして、APは、入学志願者や社会に対して、求める学生像や入学者の選抜方法を明示したものです。

このように3つのポリシーを策定し、これをPDCAサイクルの中で実質的に機能させるとともに、証拠資料をもとに検証することによって、大学教育の質を保証するシステムの構築が求められています。

(2)三重大大学における3つのポリシー

ご所属の各学部・研究科における3つのポリシーについては、それぞれのウェブサイト等で公開されておりますので、ご確認ください。

1)DP(ディプロマ・ポリシー：学位授与方針)

各学部・研究科においては、「4つの力」の育成をその専門性に適合させることによってより詳細な目標を設定し、厳格な成績評価に基づいてDPを策定しています。

三重大学は、幅広い教養の基礎に立った高度な専門知識や技術を有し、地域のイノベーションを推進できる人財を育成するために、「4つの力」、すなわち「感じる力」、「考える力」、「コミュニケーション力」、それらを総合した「生きる力」を養成します。

各学部・各研究科は、「4つの力」の養成をその専門性に適合させることによってより詳細な目標を設定し、厳格な成績評価に基づいて学位を授与します。

2)CP(カリキュラム・ポリシー：教育課程編成・実施方針)

上記のDPをふまえ、以下のような学士課程と大学院課程におけるCPを策定しています。

学士課程

三重大学は、大学、学部及び学科又は課程の教育上の目的を達成するために必要な授業科目を自ら開設し、体系的に教育課程を編成します。

教育課程の編成に当たっては、学部等の専攻に係る専門の学芸を教授するとともに、幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養するよう適切に配慮します。

授業科目を分けて、統合教育科目、外国語教育科目、保健体育教育科目、基礎教育科目及び専門教育科目とします。

大学院課程

大学院は、大学院、研究科及び専攻の教育上の目的を達成するために必要な授業科目を自ら開設するとともに、学位論文の作成等に対する指導の計画を策定し、体系的に教育課程を編成します。

3)AP(アドミッション・ポリシー：入学者受け入れ方針)

APとして、以下のような関心や意欲、態度を備えた学生を求めています。

- ・人や自然そして社会に対する豊かな感受性と幅の広い関心を備えた学生。
- ・日本語や英語などの基礎的な語学能力を身につけ、さらに多様で豊かな表現力やコミュニケーション力を培おうとする学生。
- ・旺盛な学習意欲を持ち、新しい課題に積極的にチャレンジしようとする学生。
- ・基礎的な知識を持つと同時に、広い視野や多様な視点からものごとをとらえ、主体的・論理的に考えようとする学生。
- ・企画力や実行力などの実践的問題解決能力や独創性を身につけ、社会に貢献したいという意欲を持った学生。

上記の方針に基づき、学士課程においては学部ごとに、また大学院課程においては研究科ごとに、どのような人材の育成を目指しているか、そのためにはどのような人材を求めているか、そして、それらを選抜する方法は何かを定め、入学選抜を実施しています。

3. 「4つの力」育成のための授業：「4つの力」スタートアップセミナー

三重大学では2009年度から「4つの力」スタートアップセミナーという初年次教育科目を開講しています。以下では、本授業の位置づけ、具体的な内容などを中心に説明します。

(1)本授業の位置づけ

1) 初年次教育

2008年の中央教育審議会答申によると、初年次教育(First-Year Experience)とは「高等学校や他大学からの円滑な移行を図り、学習および人格的な成長に向け、大学での学問的・社会的な諸経験を成功させるべく、主に新入生を対象に総合的につくられた教育プログラム」あるいは「初年次学生が大学生になることを支援するプログラム」と定義されています。国立教育政策研究所の調査によると、国内における2007年時点での実施率は97.0%であり(山田,2013)、ほとんどの大学において実施されていることが分かります。

初年次教育は学士課程教育の基盤に位置づけられるため、これからの4年間の学修に必要な意識や態度、およびスキルなどを包括的に扱うことが期待されています。すなわち、「4つの力」スタートアップセミナーで学んだ内容を、その他の教養教育やキャリア教育、その後の専門教育へつなげ、活かすことが重要だと言えます。

2) 教育目標「4つの力」の理解

「4つの力」スタートアップセミナーは、学生が三重大学の教育目標「4つの力」およびその具体的内容について授業を通して体験的に理解し、その素養ともなる関連知識やスキルを修得・育成するという役割も担っています。具体的には、各回の授業テーマにその回の内容と関連する「4つの力」を設定し、それを達成目標として意識づけた上で授業後にふり返る、という活動を繰り返す中で、「4つの力」の全体像を理解できるような仕組みになっています。詳しくは表2を参照してください。「4つの力」は今後の学士課程教育全体を通して高めていくことが求められます。

(2)具体的な内容

1) クラス構成

本授業は1クラス40名を基本単位とし、学部学科ごとのクラス編成を行っています。さらに4名を基本人数としたグループを構成し、半期間そのグループでディスカッションやプロジェクト活動を行います。入学時にはお互いにぎこちなかった学生たちがとても親しくなり、卒業までを共に過ごす仲間としての関係性づくりの一助になっていると言えます。

2) 授業の基本デザインや特色

・統一テキスト 授業はテキストに基づき進められます。テキストには主に講義内容、その回に関連するコラムや参考図書、授業で使用するワークシートが準備されています。

・**アクティブな授業** 第3回からはプロジェクト活動が始まり、全15回を通して「自ら課題(テーマ)を設定し、様々な情報源を用いて探求し、効果的にまとめて発表する」という一連のプロセスを体験・獲得します。情報収集も図書や論文にとどまらずアンケート調査や専門家へのインタビュー活動などを行い、そこで求められる様々な態度やスキルも学びます。また毎回の授業は、大きく「導入」「課題の共有(グループ活動)」「講義」「講義に基づくグループ活動」の4パートで構成されており、多様な活動ができる設計となっています。

・**学習目標の設定とその振り返り** 毎回の授業開始時に「特に意識すべき4つの力」と「各回の目標」を提示し、授業終了後に「授業振り返りシート」を用いて各自がそれらを文章で振り返る、という一連のサイクルを繰り返します。

・**ICTの活用** 教員から学生への連絡、教材提供、および学生同士の情報共有やディスカッションなどにMoodleを活用しています(p.24参照)。

3) 全15回の内容

各回の具体的な授業テーマとその回に意識すべき「4つの力」の項目を表2に示します。

表2 各回の授業テーマと関連する「4つの力」(2014年度)

回数	テーマ(主に関連する4つの力)	回数	テーマ(主に関連する4つの力)
第1回	導入, 大学での学び(モチベーション)	第8回	プロジェクトのピアレビュー(感性, 共感)
第2回	グループ活動の基本(社会人としての態度)	第9回	情報の吟味(批判的思考力)
第3回	アイデアの発想(感性)	第10回	レポートの作成(論理的思考力)
第4回	具体的問いの設定(課題探求力)	第11回	発表の方法(情報受発信力)
第5回	情報の種類と特徴(情報受発信力)	第12・13回	プロジェクト発表と評価(統合力)
第6回	情報収集における手順とマナー(倫理観)	第14回	プロジェクトの振り返り(統合力)
第7回	計画の立て方(問題解決力)	第15回	全体の振り返り(統合力)

引用文献

中央教育審議会(2008)『学士課程教育の構築に向けて』(答申)文部科学省

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm

経済産業省(2006)「社会人基礎力に関する研究会」(中間取りまとめ)

<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/chukanhon.pdf>

野村由司彦, 長澤多代(2010)「3つの方針の策定と一貫性の構築①:日本の高等教育における質保証の方向性」『三重大学高等教育創造開発センター News Letter』第15号.

山田礼子(2013)「日本における初年次教育の動向-過去,現在そして未来に向けて」初年次教育学会(編)『初年次教育の現状と未来』世界思想社, pp.11-27.

Ⅱ. 「4つの力」を育成するための授業と学生指導

1. 授業のデザイン

授業を担当するときには、その授業にカリキュラム上、どのような学習成果を期待されているか、学生の習熟度や関心はどの程度か、何人程度の受講生が予想されるのか、どのような教室で授業をするのか、など背景となる状況を理解したうえで、授業計画を立ててください。授業は、①学習目標、②学習方法、③省察・評価、の3要素によって構成され、この3要素が統合していることが望まれます(フィンク、2011)。

(1)学習目標

授業の成果は、教員がどれほど上手に教えたかということではなく、学生がどれだけ学習したかということで評価されます。したがって、学生にどのような学習成果を達成させるかという目標設定が、最初の課題となります。

三重大学では、「4つの力」の向上が全学的な目標となっていますので、授業がその中のどの資質を獲得させるものかを明確化します。また、学部や学科におけるカリキュラム・ポリシーに従った学習目標もあります。そのうえで、個別の授業が、何を学習させるかに関して、明確な目標を設定します。

その学習目標に関しては、シラバスに「学習の到達目標」として記載することが求められています。シラバスには、授業の終了時に、学生にどのような知識、態度、技能が身についているのかを明確にし、学生を主語にして「〇〇を説明できる／分析できる」、「なめらかなフォームのスクロールで60秒以内に50メートル泳げるようになる」など、具体的に設定することが、学習行動や評価と連動した授業デザインを設計するうえで、重要なポイントとなります。

(2)学習方法

学習目標を達成するうえで、授業内において、また授業時間外において、どのような学習を行わせるかに関する方法を設定することが、第2のステップとなります。

一般的には、知識を習得するためには講義を、態度や技能を習得するためには演習や実習という方法を選択することが一般的です。これらの授業形式は、カリキュラムで指定されています。しかし、どの授業形態であっても、学習効果を高めるためには、学生の主体性を高める必要があります。

教員が学生に対して一方的に知識を伝達する講義は、多人数の学生に対して、一人の教員が、限られた時間内に、多くの知識を伝達することに適しており、現在でも最も多くの授業が採用している方法です。しかし、一方的な講義だけの授業では、学生が受身となり、学生の個性や習熟度や理解度に合わせるものが困難です。一般的には、学生のモチベーションが

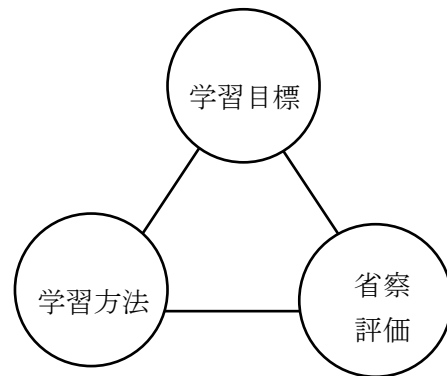


図2 授業デザインの3要素

高くない限り、知識の定着率が低いという傾向があります。授業内や授業外学習を通して、聞き手の意欲を高めたり、能動性を高めたりするための工夫を加えることが、知識の習得という目標の達成に効果的であることが、さまざまな報告によって確認されています。

三重大学では、講義、演習、実習という分類をこえて、PBL(Problem-based Learning/Project-based Learning)という学生主体型の授業方法を推進し、現在では10%を超える授業が、この方法を採用していると自己申告するまでになっています。PBLを方法として採用するうえで、さまざまな工夫が要求されますが、「4つの力」を獲得するうえでの学習効果が、授業アンケートを通して確認されており、「4つの力」スタートアップセミナーは、初年次生向けの全学クラス指定のPBLとなっております。

PBLの活用法に関してはⅡ-3で説明しますが、授業すべてをPBL形式とすることが困難であっても、授業の一部にPBLの要素を入れる方法を採用することは、学習効果を高めるために価値ある工夫です。

(3)省察と評価

学習目標を設定し、その目標を達成するための方法を設定した後で、学生に学びの振り返りを行わせ、目標に向かう学びを促す評価方法を設定する必要があります。

まず、授業の中に、学生による振り返りを組み込むことが効果的です。省察を通して、学生は、授業を通して、どのような知識を得たのか、その知識は自分にどのように役立つのか、疑問点は何か、次の授業で何を学ばなければならないのか、について、理解を深めることができます。教員は、学生の省察をもとに、学生が学習目標を達成する過程を把握し、学生の理解を補ったり、軌道を修正したりすることが可能になります。

また、評価方法を、学習目標と方法に適合したものとすることが望まれます。学習目標が知識の獲得にあるのならば、知識を問うテストが一般的です。しかし、いくつもの学習目標が設定されているならば、それに即した評価方法が必要です。知識や技能を獲得するプロセスを評価するならば、学習の経過を追う形成的評価が適切となります。知識ではなく、態度の習得を目的とする授業ならば、何度か提出される活動記録やMoodleへの投稿、授業外の課題、最終成果発表などを総合的に評価するポートフォリオ評価が効果的です。ただし、学生には、評価の基準がある程度明確に与えられることが、学習意欲を高めることにつながりますので、そのための工夫が必要となります。

たとえば、毎回授業課題のための15章のリーディングがあり、それを時間内に毎回提出することが重要であると思われる場合には、各章のコメントを授業前日までにMoodleに投稿させ、期限に間に合えば毎回2点、遅れると0点、提出しない場合には-2点とするなどを通知するならば、授業前のリーディングを重視する意図が伝わります。その30点以外に、グループワークの成果をグループ一律30点、2回行う振り返りに20点、その他Moodle課題提出の質に20点などとするならば、授業外課題をしたうえで、連帯責任の30点のために努力し、自ら振り返るという学習習慣を身につけさせるという教員の意図が伝わります。

学習方法、省察と評価は、すべて学習目標と整合性を持つように工夫することを通して、効果的な学習効果を生み出す授業デザインを立案することができます。そして、授業の過程で与えられる学生からの省察を、授業にフィードバックさせることが、状況に応じた軌道修正を行うことを可能にさせます。

2. シラバスの作成

(1)シラバスとは何か

シラバスとは、おおまかな授業計画や授業内容、評価方法を紹介したものであり、一般的に、受講予定者のためにウェブ上などで事前に開示されるものです(岡田, 2010)。すなわち、特定の授業がどのように行われるかという目標・計画と、授業課題がどのようなものであるかをあらかじめ示すものです。

このシラバスについては、授業受講前に学生が受講内容を確認するためだけのものという認識が強いかもしれませんが、使い方によっては、教員が半期または通年の授業をスムーズに進めていく手助けになることや、学生が学びをより深めていくものとなるため、効果的に活用できると望ましいといえます。

(2)シラバスの記入事項

三重大大学のシラバスはウェブシステムを用いて運用されていますが、以下のような記入事項があります。その中には、一般的にシラバスに含まれる事項と、三重大大学独自のものがあります。

一般的に含まれる事項としては、「授業名」、「担当教員」、「単位数」、「開講時間」、「受講対象者」などの制度的な情報の他に「授業の概要」、「学習の目的」、「学習の到達目標」、「教科書・参考書」、「成績評価方法と基準」、「オフィスアワー」、「学習内容(授業計画)」、「学習課題」などがあります。

「**授業の概要**」では、授業全体がどのようになっているのかを簡潔かつ漏れがないように表現することが重要です。それに対し、「**学習内容(授業計画)**」、「**学習課題**」では、授業期間内の各回の授業でどのようなことを行うかを詳細に説明するのが望ましいといえます。三重大大学版のウェブシラバスシステムでは、授業期間全体を通して記入する方式と、各回に詳細に記入する方式が選択できます。特に各回の学習課題をあらかじめ決めておけば、学生に「シラバスに従って学習をすすめるように」と指示をすることで学習課題の提示ができます。なお、大学の単位制度では、講義の場合、1回あたり90分の授業と4時間の授業外学習を必要とする内容に対して、2単位が配当されています。そのため、規定の授業外学習に見合う分だけの課題を準備しておくことが重要です。

学習を進めるにあたって、何を目的・目標とするのかについては、「**学習の目的**」、「**学習の到達目標**」の部分に記載します。「**学習の目的**」の部分では、授業が終了した時点での、学生があるべき姿(あって欲しい姿)という一般的な目標を示すとともに、「**学習の到達目標**」の部分においては、具体的な行動目標を記載します。三重大大学版のウェブシラバスシステムでは、必要に応じてこれらの説明が表示されます。

「**成績評価方法と基準**」はこれら「**学習の目的**」、「**学習の到達目標**」に対応するように記載することが重要です。成績評価は学生にとっても重要な関心事項ですので、成績評価後に齟齬が生まれないよう、暗黙的に教員個人の中でのみ用いている評価基準(例えば、私語を頻繁に行う学生の評価を減点するなど)も明示化しておくことが望ましいといえます。このように授業の概要や詳細、目的や目標、評価の方法をしっかりと考えておくことで、授業の中でどのような活動や課題を行うのか迷う場合などに、適切に選択する指針が得られたり、授業

に際してあらかじめ準備しておくべきことが明確化されることで、効率的に質の高い授業運営ができたりすることにつながります。

(3)三重大学独自の記載事項

三重大学のシラバスには、三重大学独自の記入項目があります。これは「全学の教育目標」に関わる項目や「授業の特徴」に関する項目です。

現在、各大学においては、どのような目標をもって教育活動を進めていくのかという教育目標の設定が求められ、さらにその観点で評価がなされています。シラバスにおけるこれらの項目は三重大学が大学全体で設定している教育目標にかかわって設定されており、三重大学全体の評価にもかかわるものです。そのなかで、「全学の教育目標」については、教育目標として育成することを掲げられている力(「感じる力」、「考える力」、「コミュニケーション力」、「生きる力」)の構成要素のうち、何をその授業において育成することを目標とするのかを示すものです。

このような目標の明示は、近年、大学教育に対して要請されているジェネリックスキルの育成とも関わったものになります。大学教育において、専門的な知識・技能を身につけることが目標となるのは当然のことではありますが、一方、社会で活躍するためには、領域を越えた一般的な力を身につけるということが大切になります。「全学の教育目標」の欄であげられているものは、それらとも対応するものであり、授業の中ではなかなか意識されにくいこれらの力について明示化することによって、学生にもその成長を意識させるという意味合いがあります。なお、授業の目的・目標に従って成績評価がなされるように、ここで提示される教育目標の達成度についても、授業改善アンケートなどによって評価がなされます。

「授業の特徴」の欄には、特定の教育方法について提示をするようになっています。ここであげられている教育方法は、三重大学の教育目標を達成するための具体的な手立てとして三重大学が提案しているものです。領域を越えたジェネリックスキルというものを身につけるためには、教員の説明を受動的に聞くという授業では不十分であると考えられます。積極的に学生自身もかかわってこそ、そのような力が身につくと考えられます。ただ、そのような授業では、学生自身も積極的な態度をもって授業に臨む必要があるため、あらかじめそれらを明示しておくことが大切と考えられます。「授業の特徴」欄を通じ、シラバスによって教育方法を提示することで、学生側にも授業への心構えを求めることができます。

(4)授業期間全体を通じた活用

さて、制度的に用いられるシラバスは、特に受講前に、受講を決定するために用いられるという認識が一般的であると考えられますが、上述の通り、授業の全体像を詳細に示す「ガイド」であると考えれば、授業期間全体を通して活用されることが望ましいといえます。その際、あらかじめ計画をしていたものから、授業の進行が変わっていくということもあり得ることで、むやみに計画とは異なる授業を進めることは望ましいものではありませんが、学生の様子や授業の状況によって授業運営を臨機応変に変えていくこと(デザインチェンジ)は、むしろ大切なことであると考えられます。そのような場合、その場に応じて、シラバスを変えていく必要が出てきます。

このように授業の様子にあわせて変更していくシラバスを「ゴーイングシラバス」といい

ます。特に、三重大大学では授業運営用のシステムとして Moodle が活用可能ですので、シラバスに記載した各授業回の計画を Moodle に載せ、適宜変更していくという形で、「ゴーイングシラバス」を実現することができます。なお、Moodle では、ファイルをアップロードしたり、ウェブページにリンクを貼ったりできますので、特に授業課題などを具体的に載せたような、「ゴーイングシラバス」の実現も可能です。

シラバスの作成は、教育改善活動における PDCA サイクルの観点から考えると、その最初にあたる Plan の段階に相当します。これによって授業全体のグランドデザインが描かれることとなりますので、よりよい授業が展開されるよう十分によく構成されていることが望めます。

ウェブ上に「シラバス作成のためのガイド」が準備されていますので、ご参照ください。

<http://syllabus.mie-u.ac.jp/syllabus/help/guide/>

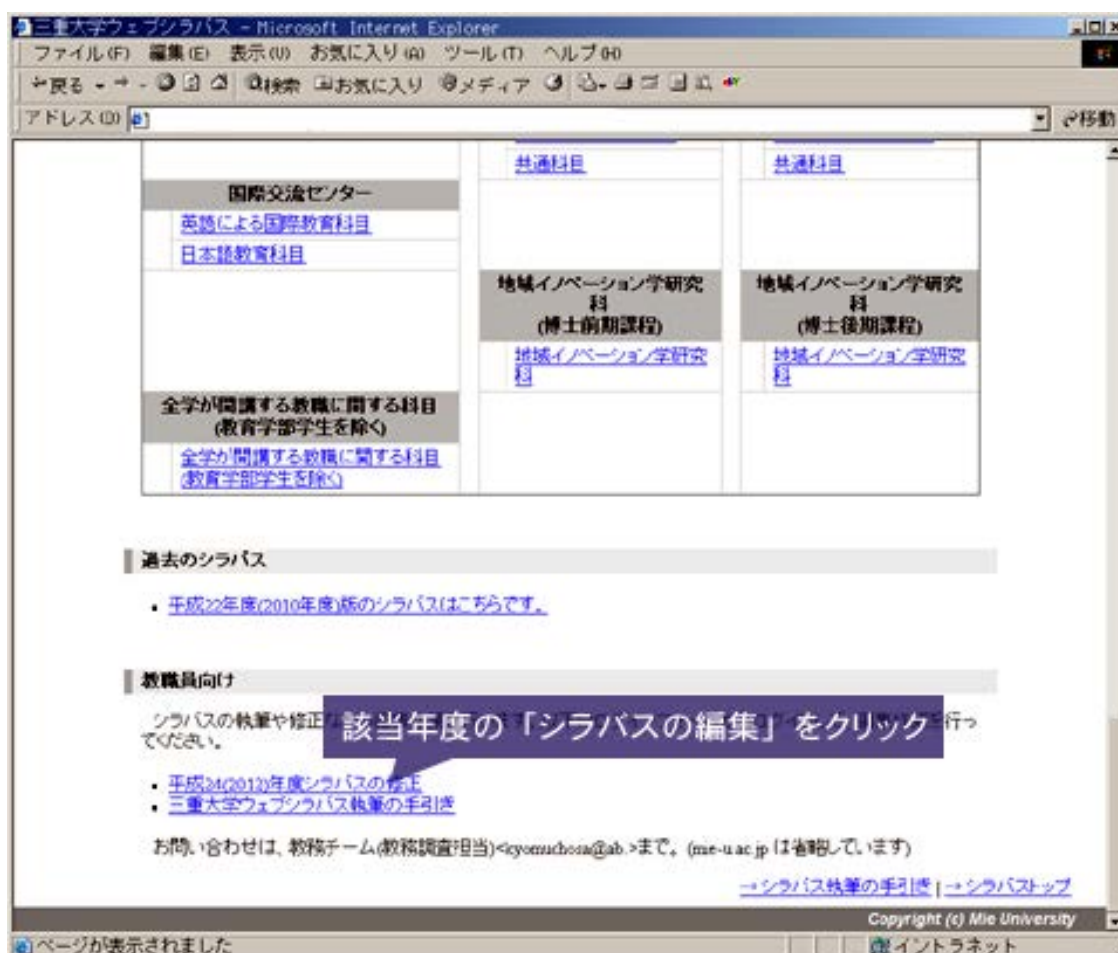


図3 「シラバス作成のためのガイド」より

3. PBL の活用

(1)「4つの力」を育成する教育の中核としてのPBL

三重大学は、2005年より、「4つの力」育成の中核を担う教育方法として、PBL教育(Problem-based/Project-based Learning)を位置づけ、全学的に取り組んできています。なぜならば、PBL教育には次のような利点があるからです。

- ・能動的な学習法であり、成人教育に適している
- ・身近な問題を提示するので、学生が興味を持ちやすい
- ・得られる知識が、問題解決レベルの深い知識であり、応用力が身につく
- ・学習した知識が永く留まる
- ・小グループ学習なので、①コミュニケーション能力が高まり、②人間性を磨くことができ、③チームで達成する練習になる

このような教育法は、将来の予測が不可能な時代に、社会や科学技術の変化に対応することができる人材の育成が求められる現代の大学教育に特に求められています。たとえば、2012年8月28日付け中央教育審議会答申では「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」というテーマで、「生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材は、学生からみて受動的な教育の場では育成することができない。従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見出していく能動的学修(アクティブ・ラーニング)への転換が必要である。」と指摘しています。このような能動的学習の中心になるのがPBL教育なのです。

(2)PBL教育の特徴

PBL教育のコアになる基本的特徴は次のようになります。

- ①問題との出会い、解決すべき課題の発見、学習による知識の獲得、討論を通じた思考の深化、問題解決という学習過程を経る学習を行う(問題基盤性)
- ②学習は、学生による自己決定的で能動的な学習により進行する(学習自己決定性)
- ③学生による自己省察を促し、能動的な学習の過程と結果を把握する評価方法を使用する(形成的評価)

(3)多様なPBL教育の可能性

このようにPBL教育は、何よりも現実的な問題との出会いを出発点に、課題を発見し、グループ学習なども含んで学習・探求をし、問題解決をしていくというプロセスをたどることを主な特徴としています。その上で、多様な展開が可能になります。

参考に、いくつかのタイプを紹介します。

①問題提示型PBL(事例シナリオ活用を含む)

学習の契機になる問題との出会いを教員が提示することによって学習が展開していく。ただし、学習課題の設定や学習の遂行は学生の自己決定による。多人数あるいは少人数での授業、事例シナリオを活用した授業などの形態がある。

②問題自己設定型 PBL

学習の契機になる問題も学習課題もすべて学生自身が設定することによって学習が展開していく。共通教育授業，専門指向型授業のどちらでも可能である。またグループ全体で問題を探求したり，あるいは個人毎に探求したりする形態もある。

③プロジェクト型 PBL

学内外の要請や課題設定に基づいて，ある企画の遂行・達成をめざして問題解決的な学習を行う。つまり問題解決及び課題達成の志向性が強い。企画や課題の内容や遂行方法によって，イベントなどの課題実践遂行タイプ，制作やものづくりを課題とするタイプ，問題解決のための提案をしていくタイプなどがある。

④実地体験型 PBL

様々な場での実地体験を通して，問題との出会い，問題・課題の発見，問題解決を進める学習。ただし何よりも体験することに重きを置いているため，問題解決の成果をもとめるよりも，実地での体験を重視する。主眼とする学習内容によって，学習課題の発見を重視するタイプ，専門的な基礎技能を習得するタイプ，実際の問題解決過程に参加するタイプなどがある。

(4) PBL 教育の学習過程

PBL は多様に展開可能ですが，モデル的な学生の学習過程を示します。

①事例問題の提示

記述・画像・映像などを通して，学生にとって身近な問題・課題を示す。

②グループ討論・全体セッション A

探求ないしは解決すべき課題を見出す。何を学習すべきか，どのような学習資源を利用するかを決める。学習計画を立てる。

③自己学習

学習計画に沿って自己学習し，その内容をまとめ，グループメンバーに報告する用意をする。

④グループ討論・全体セッション B

自己学習成果の報告，学習成果に基づいて問題解決案の作成。教員は必要に応じてミニ講義をすることも可。

⑤成果発表の準備

その後追加した学習内容も含めて，レポートやプレゼンテーションの準備。

⑥成果発表・振り返り

レポート提出またはプレゼンテーション。その後自己評価や相互評価を基に学習活動の振り返りを行う。

(5)PBL 特性確認表

1)授業の PBL 度チェック表

PBL の諸特徴の観点から，個々の授業が PBL の特性が生かされた授業であるかを，確認するために，チェック表を活用してください (表 3)。PBL の性格によって特徴が異なるため，すべての項目に該当するものを求めるものではありません。

表3 授業のPBL度チェック表

- 具体的・現実的問題から出発
- 問題解決を指向
- 学習課題を学生自身が設定
- 学習の進行を学生が主導
- グループ学習の活用
- 教員はファシリテーター（学習支援者）として関与
- 学習に必要な資源の確保
- 授業外の学習時間と場所の確保
- 学生による自己の省察
- プロセス評価の重視

2) PBL 特性確認レーダーチャート

個々の授業のPBL特性を簡単にわかりやすく確認するためのチャートも用意しました(図4)。個々の項目の点数が高いとか全体の面積が広がっていることがPBLとして「優れている」ことを示すものではありません。あくまで、個々のPBLが持っている特性を確認するための参考資料として活用してください。特に、授業の事前と事後に利用するならば、授業の計画と実際とを振り返るのに役立つことができます。

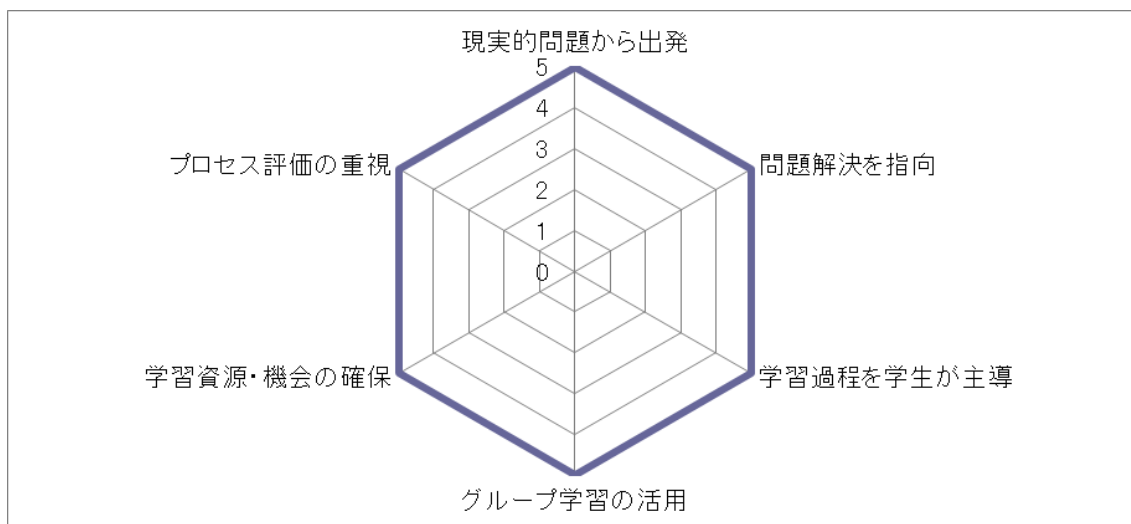


図4 PBL 特性確認レーダーチャート

PBL 教育に関する詳細なガイドとして高等教育創造開発センターによる『三重大学版 Problem-based Learning の手引きー多様な PBL 授業の展開』(2011)が準備されています。高等教育創造開発センターのウェブからもダウンロードできますので、ご参照ください。

<http://www.hedc.mie-u.ac.jp/pdf/PBLmanual-201101.pdf>

4. 授業改善のための研修会(FD)とリソースの活用

高等教育創造開発センター(HEDC)はこれまで様々な教員研修会(FD)企画を全学に提供してきました。2009年度以降の回数を見ますと、2009年度8回、2010年度8回、2011年度12回、2012年度4回、2013年度8回となっています。

実施されたFDをいくつかのパターンに分けてみます。

PBL教育の学内への進展を図るもの、PBL・初年次育等三重大学の成果を主に学外にアピールするもの、大学教育やマネジメントに関する国内外の最新動向を学ぶもの、教育技術・教育手段の習得に関するもの、英語で授業を行う方法に関するもの(過去4回実施)、前年度の入試の分析結果に関するもの(毎年実施)、三重大学の教育GPに関する報告(毎年実施)、TAのための研修会(毎年実施)、新任教職員のオリエンテーションのためのもの、となります。

ちなみに最も回数が多く多様なパターンがあった2011年度のリストを例として表示します。

2011年度 12回

- ・入試分析報告会「23年度入試を振り返るー東海地区で揺れる三重大学ー」講師：清水博氏(河合塾中部地区営業部長), 6月
- ・「平成23年度三重大学教育GPヒアリング」, 6月
- ・「2010年度前期PBLセミナー公开发表会」, 7月
- ・「3つの方針の策定に向けてー一貫性構築のための3つのポリシーの策定方法ー」講師：沖裕貴氏(立命館大学 教育開発推進機構 教授), 9月
- ・「就業力育成のためのキャリアアップ研修会ー就業力を身につけるために今できることー」講師：杉田一真氏(嘉悦大学経営経済学部 専任講師)
- ・「三重大学eポートフォリオの新しい展開」講師：生物資源学部准教授森尾吉成氏(高等教育創造開発センター情報システム部門), 10月
- ・「教育の評価について考える」講師：教育学部 准教授中西良文氏(高等教育創造開発センター 教育評価部門長), 11月
- ・「英語で授業する」講師：堀江未来氏(立命館大学国際教育推進機構 准教授), 11月
- ・「広報・入試・カリキュラム改革の結果の分析をしていますかー入試フォローアップシステムを使った事例の紹介ー」講師：工学研究科教授飯田和生氏
- ・「三重大学版初年次教育の展開と検証」三重大学全学初年次教育の実践報告と他大学からのコメント, コメンテーター：中部大学工学研教授・教務部長 大西直之氏, 高田短期大学オフィス人材育成科准教授 杉浦礼子氏, 2月
- ・「平成23年度三重大学教育GP成果報告会」, 3月
- ・ティーチング・アシスタント(TA)のための研修会, 3月

成果を主に学外にアピールする事例として：「三重大学版初年次教育の展開と検証」

2012年2月23日

プログラム

13:30~13:40 開会挨拶/13:40~14:00 3つのポリシーと初年次教育の意義

14:00～15:10 ミニシンポジウム

三重大学全学初年次教育の実践報告と他大学からのコメント

<コメンテーター>

大西直之先生(中部大学工学部教授・教務部長), 杉浦礼子先生(高田短期大学オフィス人材育成科准教授)

15:25～17:20 テーマ別ディスカッション

17:20～17:30 閉会挨拶

17:45～ 懇親会(学内レストラン「ばせお」にて)

高等教育創造開発センターが 2006 年度以降取り組んできたもうひとつの活動として、「PBL 教育支援プログラム」があります。この取り組みは研修会という形を取ってはいませんが、FD 活動に位置づくと考えられますので、ここで紹介します。

まず全学の教員に向けて、すでに PBL を実践している、もしくはこれから行う授業に関して、支援プログラムがある旨のアナウンスがあり、応募教員は「PBL としての目的・内容・方法を有している旨」を記述し、授業に関する資料を添付します。応募が出そろった段階で教育開発部門を中心とした高等教育創造開発センター教員が審査の分担をし、「PBL として適切であるか否か」と「必要なアドバイス」を記述し、審査委員会で議論したうえで採択、改善の上採択、不採択を決め、採択者には支援金を提供します。採択された授業は実施された後、『HEDC ニューズレター』に報告義務があり、これまでずっと掲載されてきました。

2007 年には『三重大学版 Problem-based Learning 実践マニュアル』が刊行され、2011 年には『三重大学版 Problem-based Learning の手引きー多様な PBL 授業の展開』が刊行され、応募者も審査する側も共通の座標塾を持つことができ、「努力目標」が共有化されてきました。また、ニューズレターに蓄積されてきた実践報告は、この二つのマニュアルに掲載されていた実践報告と合わせて、三重大学の PBL 教育の貴重なリソースとなっています。こうしたプロセスそのものが「研修会」という形を取らないながらも FD として機能しているものと考えます。

高等教育創造開発センターのウェブサイトには、上記に触れたような二つの PBL マニュアル(「教育支援のリソース」欄に)、また 2008 年 12 月以降のニューズレター全 38 号が全文掲載されています。また「イベント」には 2008 年以降のすべての FD 研修会の概要が記載されています。また「公表した教育の成果」には同センター教員が行ってきた「招待講演」「学会等における発表」「著書」「論文」「その他」の区分で多くの成果物が紹介されており、「HEDC 報告書」には、これまでセンターが企画・分析に関わった「授業改善アンケート」「修学達成度評価」「教育満足度調査」等の結果が掲載されています。

また同ウェブサイトには「学習支援のリソース」と「教育支援のリソース」の項目があり、前者には学生が PBL 教育を受ける際の学生側の基礎知識や心構えが書かれた資料が掲載されており、後者には各種 FD の際に資料として用いられた文書等が収められています。教員の皆様には FD への参加とともに、こうしたリソースを大いに活用していただけることを願っています。

5. きめ細かな学生指導

(1)三重大大学の学生支援体制

本学では、「学生指導・支援担当教員」という制度があり、学生の学生生活を構成している修学、生活、就職、健康といった側面に沿って、各学部、学年ごとに相談や支援を担当する教員を設定しています。本学ウェブページで確認することができますので、詳しくはそちらをご参照ください。

◎三重大大学トップページ>在学生用ページ>様々な相談>学生指導・支援担当教員

<http://www.mie-u.ac.jp/students/support/tutorial.html>

さらに、学生総合支援センターを中心とした全学的な総合支援体制も構築されており、学生生活の諸側面に応じて、各部署や各相談窓口が学生の相談・支援に当たっています(図5)。

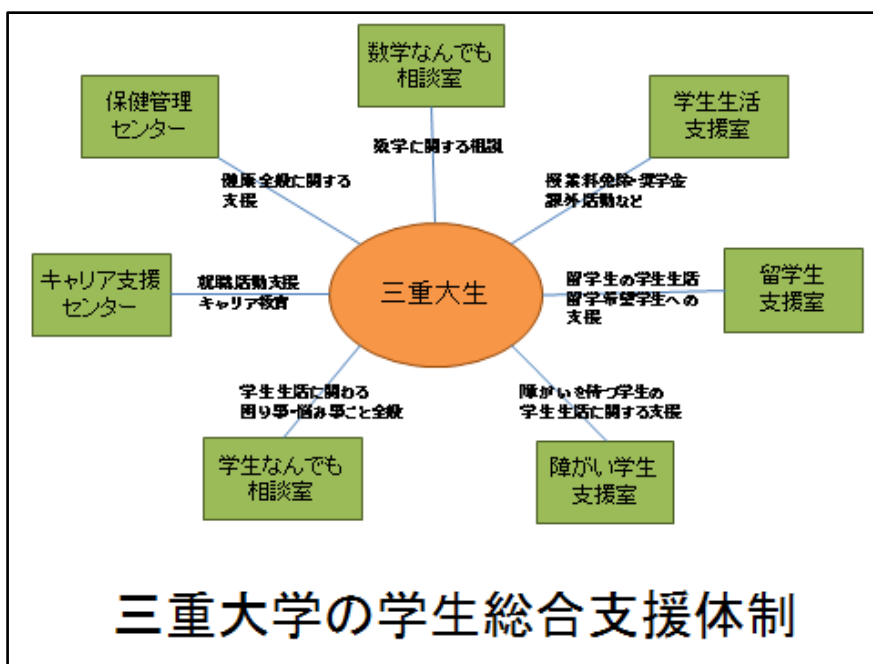


図5 三重大大学の学生総合支援体制

(2)学生の学修に関する相談・支援について

数学なんでも相談室(共通教育棟1号館2階 理系基礎教育室)

数学の問題の解き方や考え方など、数学に関する学生の困りごとに関して、非常勤教員が相談対応に当たっています。

障がい学生支援室

障がいのある学生が学修及び研究を行う上で必要な支援を行うとともに、障がいのある学生に対する生活指導體制の構築を全学的立場から支援しています。

◎三重大大学トップページ>センター>学生総合支援センター>障がい学生支援室

<http://www.mie-u.ac.jp/life/supportstudents/index.html>

(3)学生生活サポートや経済的な問題に関する相談・支援について

学生生活支援室(総合研究棟Ⅱ1階 学生サービスチーム)

入学料や授業料の免除に関することや日本学生支援機構による奨学金に関すること等の相談や実際の手続きを行っています。その他、学生寄宿舎に関することや学生の課外活動に関する支援を担っています。

◎三重大学トップページ>センター>学生総合支援センター>学生生活支援室

<http://www.mie-u.ac.jp/life/support/index.html>

留学生支援室(総合研究棟Ⅱ 1階 学生サービスチーム)

留学生に関すること全般について相談・支援を行っています。また、日本人学生の海外留学支援についても行っています。

◎三重大学トップページ>センター>国際交流センター

<http://www.cie.mie-u.ac.jp/index.html>

(4)学生の就職に関する相談・支援について

キャリア支援センター(総合研究棟Ⅱ 1階 就職支援室)

学生が低学年から主体的に進路選択ができるよう、全学的な立場から、キャリア教育、インターンシップ及び就職活動支援等を推進しています。

◎三重大学トップページ>センター>学生総合支援センター>キャリア支援センター

<http://www.mie-u.ac.jp/life/career/index.html>

(5)学生の心身の健康に関する相談・支援について

保健管理センター(総合研究棟Ⅱ 1階)

健康診断に関連した業務、日常生活における疾病や怪我に対する応急処置、心理カウンセリング等の学生のための学校医業務、および教職員に対する産業医業務を行っています。

◎三重大学トップページ>センター>保健管理センター

<http://www.mie-u.ac.jp/health/>

(6)その他、学生の悩みごと・困りごと全般の相談・支援について

学生なんでも相談室(総合研究棟Ⅱ 1階)

ジャンルを問わず、学生生活を送る上で生じる様々な悩みごとや困りごとについて、広く相談をすることができます。心理カウンセラーによる継続的なカウンセリングがメインですが、相談内容に応じて学内外の様々な部署・機関を紹介することもできます。また、教職員からの学生対応に関しての相談も受け付けています。

◎三重大学トップページ>センター>学生総合支援センター>学生なんでも相談室

<http://www.mie-u.ac.jp/life/consultation/index.html>

引用文献

岡田美智男(2010)「リソースの中に埋め込まれた学び」, 佐伯胖(監修)『「学び」の認知科学事典』大修館書店, p.530.

フィンク, L. ディー(2011)『学習経験をつくる大学授業法』玉川大学出版部.

Ⅲ. 「4つの力」を確認する評価システム

1. 三重大大学の授業評価

(1) 授業アンケートの改訂

授業評価は、ほとんどの大学で実施されている教育内容・方法の改善策の1つであり、2011年度において、学生による授業評価を実施した大学は、全国の学部もしくは研究科の93%におよびます(文部科学省高等教育局, 2013)。授業評価は、授業を受けた側からの反応を集めることで、想定通りの理解や知識の定着ができていたのか、また授業のどこを改善することができるかなどの情報を収集することができます。教員側と学生側は授業に向かう立場も異なりますので、しばしば授業に対する認識にズレが生じてしまいます。授業評価はそうしたズレを補正する機会ともなります。

この授業評価について多くの大学では、「板書は適切か」や「話は聞き取りやすいか」などの授業の方法について尋ねる項目が多いのですが、三重大学では以下の理由から、従来の項目には問題があると考えました。

- 1) 従来の項目は、よくない授業を見つけ出すためのチェックリストであった。
- 2) 多様な授業方法(フィールドワークなど)への展開をしぼる足枷であった。
- 3) よい評価結果をさらに上げることへの疲弊感・マンネリ化が出てきた。

(2) 新授業アンケートの目的・内容

そこで、三重大学では2010年度より、「よくない授業の改善」のための授業評価から、「よい学びの評価」へと授業評価の目的を変更し、それに合わせて、授業評価項目を改訂しました。「学生がよく学ぶ授業」を「よい授業」とすることで、多くの教員が同意できる目標となったことと、近年の履修ポートフォリオなど学生の学びの振り返りを重視する動きに対応できることとなりました。

「あなたの学びに関する項目」は、以下のものです。

1. 総合的に判断して、この授業に満足できた。
2. 授業内外の学習に取り組むために、シラバスを活用した。
3. この授業の内容について理解できた。
4. 新しい知識・考え方・技術などが獲得できた。
5. この授業の受講によって、学業への興味・関心(意欲)が高まった。
6. この授業で学んだことや考え方について、意識するようになり実際に試してみたりした。
7. 学びを深めるために、調べたり尋ねたりした。
8. 授業1回当たりの授業外学習(予習・復習・課題や試験のための学習・関連する読書や活動など)は何時間でしたか。
9. この授業を何回欠席しましたか。

従来からある項目のうち、学びにつながる項目は残してはいますが、細かい授業方法の評価は削除し、代わりにより深い学習行動など(項目6~7)も評価させるように変更しました。これらの項目は評判のいい授業であっても案外高い評価とならず、学生の学びをより深めるため、いっそう高いレベルでの改善策を模索してもらうことを期待しています。

従来の授業評価のような「授業改善のための教育方法の評価」については、裏面に「授業改善のためのアンケート」として、簡易な形で残してあります。「板書」や「声の大きさ」などにいちいち5段階評価をさせるのではなく、要改善項目にだけチェックをつけるという方法にしました。これによって、学生にとってもすべてを評定する負担感がへる利点と、教員にとっても本当に改善すべき項目だけ改めるという利点があります。

V. 項目リスト

授業の概要の説明(口頭、シラバスなどによる) 31. 授業の目的・到達目標の説明 32. 授業全体の計画、学習内容の説明 33. 成績評価の方法、評価基準の説明 教室内で使用する教材 34. 授業内で提示される資料(板書や投影資料など) 35. 配付資料・Web資料など(Moodleも含む) 教員の行動 36. 話し方(聞き取りやすさなど) 37. わかりやすい説明 38. 発展的な内容の説明 39. 学習内容の具体的な活用方法の説明 40. 私語・遅刻・睡眠・携帯メールなど 不謹慎な行動への対処	学生参加の機会 41. 学生自身に考えさせる工夫 42. 質問の機会 43. 学生との対話の機会 44. 学生同士で考えを深め合う場や機会の提供や支援(グループ活動の実施や支援など) 授業外学習のための支援 45. 自学自習のための教材・資材等の情報(参考図書・参考資料等も含む) 46. 授業時間外での課題(宿題も含む) 47. 学習に対する助言や補足 48. 質問や課題への適切な対応 49. Moodleや電子メールなどの使用 その他教員から指定のある項目 50. (教員が指定する項目)
--	---

最後に、当該授業が「4つの力」をつけることにどれだけ貢献しているかという評価も入れました。これは大学認証評価等に対応するためのものです。また、自由記述欄には、改善を要望する点のみ記述させるのではなく、よかった点も記述できるように、「先生に続けてほしいと思うこと」と「自分が先生だったらこうしたいと思うこと」の2つを記入できるようにしました。これによりよかった点を直接指摘してもらえ、教員にとっても教育意欲を高めることになることと、単なる不満が書きなぐられることはなく、改善策を提案する形となり、授業アンケートを受け取る教員としても建設的に受け止められるようになると期待されます。

(3)ウェブによる授業アンケートシステム

三重大学では、通常の学期末におこなう紙媒体による授業アンケートだけでなく、授業中のいつでも実施することができるウェブによる授業アンケートシステムも用意しています。これをもちいることで、アンケート項目を自由に変更したり、複数回実施したりすることもできます。ぜひご活用下さい。システムのマニュアルは高等教育創造開発センターのサイト(<http://e-feedback.mie-u.ac.jp>)に掲載してあります。

2. 三重大大学の教育改善活動

(1)教育改善のPDCA

三重大大学では、教育目標「4つの力」を中心に、大学教職員と学生がPDCAサイクルを構築しながら、教育改善活動を実施しています(図6)。すなわち、Planとしての「4つの力」、Doとしての教育実践、Checkとしての各種評価活動、Actionとしての評価に基づく改善活動があり、これらサイクルに継続的に関わることで、学習の質保証につなげています。アンケートは全学教務委員会が管轄し、高等教育創造開発センター教育評価部門が実施にあたっています。

本節では、主として「Check」に該当する各種評価活動の中でも、学生が回答するアンケート、及びアンケート実施に関わるウェブシステム等について紹介していきます。なお、それぞれの結果については、全学教育会議等で報告される他、高等教育創造開発センターのウェブサイトでも確認することができます。教育の改善にご活用ください。

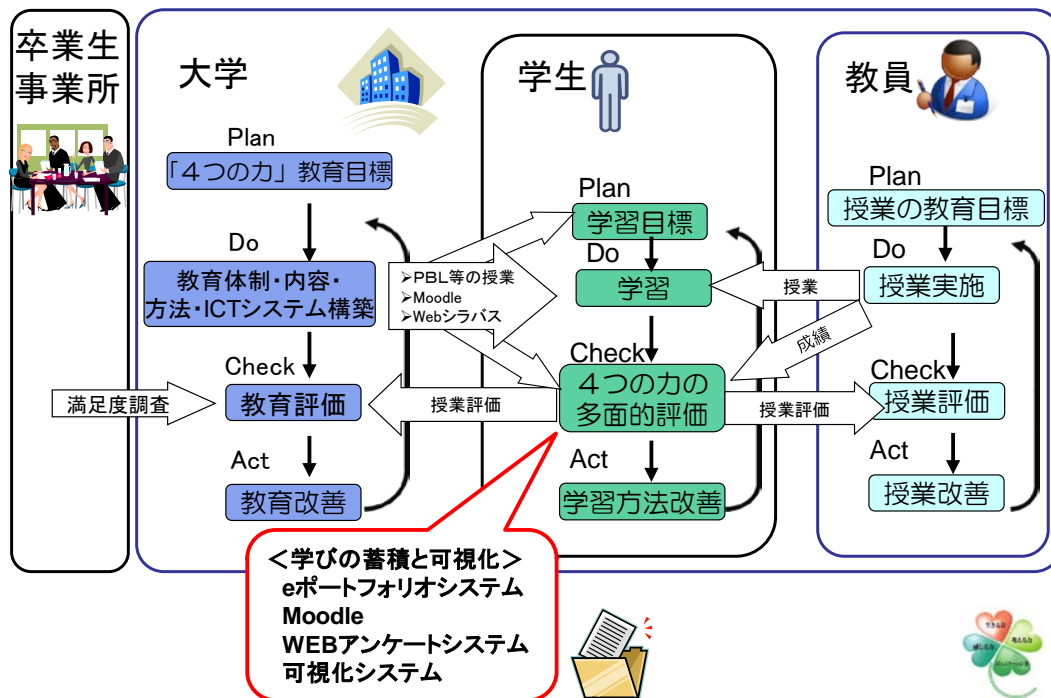


図6 三重大大学教育改善サイクルとICT

(2)アンケートの種類

大学で実施されるアンケートを紹介します(図7)。

1)授業評価アンケート (学びの振り返り(表面)/授業改善のためのアンケート)

学期末に、授業毎で実施されます。詳しい説明は後述します。

2) 修学達成度評価 (三重大学生の4つの力に関するアンケート調査)

毎年実施される、大学の教育目標に関する調査です。詳しい説明は後述します。

3) 教育満足度調査（三重大学生の三重大学に対する意識調査）

教育的活動や就職支援の取り組み、学内施設等、大学に関する様々な事項について満足度を調査しています。数値の集計だけでなく、得られた自由な意見は大学内の各部局に送られ、返答が用意されます。

4) 卒業生、修了生、事業所に対するアンケート

3年に一度の間隔で、郵送調査で実施されます。本学の教育についての満足度や社会のニーズを把握することを目的としています。

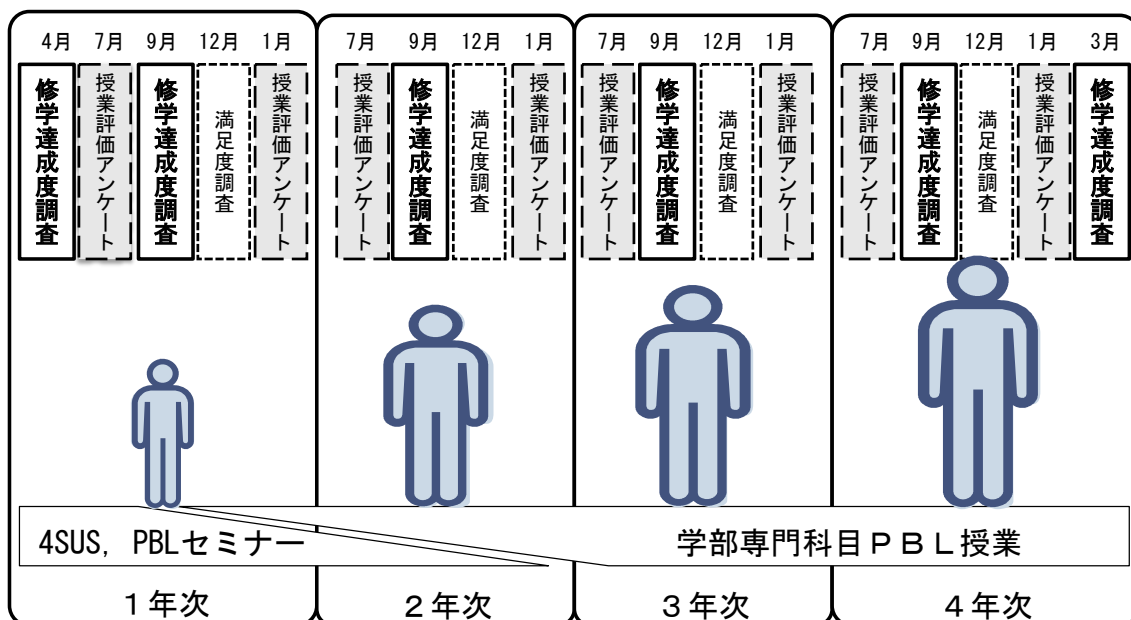


図7 教育改善のために三重大学が実施する各種アンケート

(3) 就学達達成度調査

毎年実施される、大学の教育目標に関する調査です。全学の教育改善及び、学生の学びの振り返りに活用されます。実施方法は調査用紙とウェブの2通りがあり、1年春のみ全学必修科目「4つのカスタートアップセミナー」(4SUS)の授業内で調査用紙をもちいて実施し、その後は後期授業の履修登録時期に、ウェブフォームを使って回答することになります(<http://webenq.mie-u.ac.jp>)。学内の様々な調査活動(図7)の中でも、「4つの力」に対する意識を、心理尺度を援用して直接尋ねているという特徴を持ちます。

調査内容は「4つの力」と以下のように対応しています。

感じる力：動機づけ尺度を用います。大学の学習に対する動機づけを測定します。

考える力：社会的クリティカルシンキング(批判的思考)尺度の一部を用います。課題に対する認知能力や論理的問題解決能力を測定します。クリティカルシンキングへの志向性と大学生活内での経験の2側面を尋ねています。

コミュニケーション力：社会的クリティカルシンキング尺度の一部と、コミュニケー

ションに対する自信を問う質問の2尺度を用います。前者は、日常生活における対人的・社会的な状況の中で働くクリティカルシンキングを含み、志向性と大学生活内での経験の2側面を測定しています。

回答は個人ごとに蓄積され、4年間の変化を学生自身を知ることができるようになっていきます。今後は結果閲覧画面が授業評価アンケートのシステムと統一される予定です。

回答結果は、高等教育創造開発センター教育評価部門がとりまとめ、報告書を高等教育創造開発センターのウェブサイトに掲載している他、全学教育会議の場において、各学部の教務委員に報告されています。

(4)就学達成度可視化システム

学習成果を実質化するために「学習成果の可視化」とその振り返りが注目されています。振り返りは、学生のメタ認知能力の育成や、適切な目標設定につながると期待されています。

三重大大学の「修学達成度可視化システム」は、ウェブ授業アンケートによる学生の授業評価、ウェブシラバスによる教育目標の明示、e-ポートフォリオや Moodle による学習履歴の参照、といった包括的な学習支援システムの1モジュールとして開発されました(図8)。本節ではその概要と利用方法について紹介します。

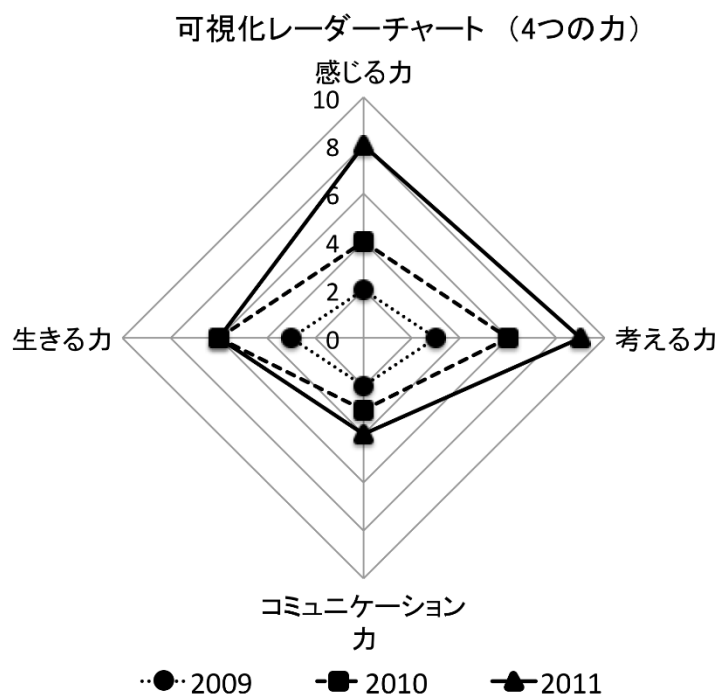


図8 学生にフィードバックされる就学達成度可視化レーダーチャート(イメージ図)

システムの利用(詳細な説明についてはシステムに PDF を準備予定)

アクセス：<http://e-feedback.mie-u.ac.jp> ※授業評価アンケートシステムと同じです。

1)基本機能

学生が履修した授業ごとに成長度を自己評価し、その値を蓄積して学生個人ごとにレーダーチャートに表示し、フィードバックします(図 8)。表示には、「授業評価アンケート／学びの振り返りシート」における「4つの力」の下位 17 側面の成長への回答(0/1 データ)を用いています。

また、学生自ら評価した成長度の累積値と教員側が評価した成長度の累積値の比較が可能です。各授業におけるウェブシラバス上の 4 つの力の下位 17 側面のチェック状況(重視度)×授業成績(合格した授業の得点 0.6~1)の値を、授業ごとに加算したものを表示できます。現状、この客観的指標は表示させていません。ウェブシラバスでのチェック状況などを確認しながら、準備が整い次第公開していく予定です。

推奨授業の表示：過去の「授業評価アンケート／学びの振り返りシート」データを参照して、「4つの力」の各側面に、学生の成長度が高い教養教育の授業名が表示されます。

2)システムの利用例

教員：システムにログイン後、自分の授業を受講する学生についてのみ、修学達成度の状態を確認することができます。ただし、当該授業の「授業評価アンケート／学びの振り返りシート」に未回答の学生については閲覧することができません。学生ごとの授業で重視する力(教育目標)の実現度の把握や、それを話題とした履修指導にご活用ください。

学生：教育目標に照らした就学達成度の把握と履修選択への活用(4 つの力の成長バランスの把握)が可能です。学生指導を担当される先生には、学生に対するシステム利用の推奨をお願いいたします。

引用文献

文部科学省高等教育局(2013)「大学における教育内容等の改革状況等について」

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/_icsFiles/afieldfile/2013/11/14/1341433_01.pdf

IV. 「4つの力」を鍛える学習支援システム

1. 三重大学 Moodle

(1) Moodle とは

Moodle はオープンソースの学習支援システム(Learning Management System, LMS)です。教員から学生への連絡, 教材提供, 課題提出, 小テスト(自動採点), 成績管理, 掲示板, および学生同士の情報共有やディスカッションなど, 多様な機能を持ちます。

三重大学では, 2006 年度(試行期間も含めれば 2005 年度後期)から, Moodle を三重大学用にカスタマイズした「三重大学 Moodle」を提供しています。

おかげさまで大勢の方々に利用していただいています。2013 年度末の時点でコース数 2,000(概算), 学生ユーザ数 7,200(概算), 教職員ユーザ数 1,300(概算), 2013 年度の閲覧ページ数は 736 万を数えました(図 9)。

2012 年度後期から新バージョンの Moodle 2 を並行稼働しています(それ以前の Moodle を以下では Moodle 1 と呼ぶことにします)。

2014 年度はすでに Moodle 2 のほうが若干多く利用されています。今からなら, ぜひ Moodle 2 のほうをご利用ください。

三重大学 Moodle は, 三重大学の統一アカウントを持つ教職員・学生であれば, 何の登録もなく利用できます。教職員のかたはコース作成ができます。教務システムとは切り離されていますので, 教務上の科目とは切り離して自由にコースを作ることができ, 学生も最初の授業の日から Moodle が利用できます。ゼミや研究室, 研究グループや委員会の連絡用のグループウェアとしても自由に使えます。

各コースの中は外からは覗くことができないので, どのような使い方をされているかは, いろいろな機会に先生方にお聞きした範囲でしかわかりませんが, 講義資料のアップロード, レポート提出, 小テストといった e-Learning 的な使い方にとどまらず, フォーラム(掲示板)や Wiki(だれでも編集できるウェブページ)などのコミュニケーション機能が便利だという声をお聞きしています。

フォーラムの利用法も, 質問や授業内容についてのディスカッションにとどまらず, 添付ファイルで作品をコース全員に見てもらって意見を出し合ったり, 評価を付け合ったりすることもできますし(ピアレビュー), その学期・そのコースの自分の全書き込みを縦断表示して, 学んだことを振り返るといったポートフォリオ的な使い方もされています。もしまだ Moodle を利用されていない先生がおられましたら, ぜひアクセスして, 統一アカウントのユーザ名・パスワードを打ち込んでログインし, ご担当科目のコースを作成してください。お分かりにならないことがありましたら, Moodle サポートチーム moodle-support@ml.mie-u.ac.jp までご質問ください。Moodle の中でも「ご意見箱」というコースを用意していますので, こちらにもご質問・ご意見をお寄せください。

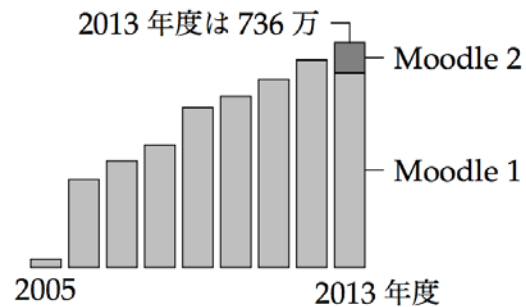


図 9 Moodle 閲覧数の推移

Moodle のトップページは、全学の学生へのアナウンスにも使っていただいています。ここへの掲載依頼も上記メールアドレスまでお寄せください。

(2)まずログインしよう

「三重大 Moodle 2」のアドレスは <http://portal.mie-u.ac.jp/moodle2/> です。ここにアクセスすると、図のように左上に「ユーザ名」「パスワード」の入力欄がありますので、ここに統一アカウントのユーザ名とパスワードを入れてください。教職員のユーザ名は 8 桁の職員番号、学生のユーザ名は 6~7 桁の学籍番号です。教員のパスワードは、シラバス・成績・教員活動データベース入力などで使うものと同じですが、もしおわかりになれば、総合情報処理センターにおたずねください。学生はメールや履修登録用のパスワードと同じです。



図 10 Moodle2 の画面 (変更予定)

最初にログインしたら、まずご自分のプロフィール(プロフィール)が正しいかお確かめください。プロフィールの必須項目が抜けている場合はプロフィール設定画面に自動的に飛びますが、そうでない場合は、画面のどこか(トップページなら一番上)に「あなたは何野何某としてログインしています」のような文言が出ていますので、何野何某の部分をクリックして、プロフィールのページに飛んで、左の「管理」の「プロフィールを編集する」をクリックして、編集してください。写真や似顔絵(100×100 ピクセル程度)も掲載できます。終わったら、一番下の「プロフィールを更新する」をクリックしてください。

(3)コースを作ろう

自分の位置がわからなくなったら、画面左上の「パンくずリスト」で「Home」をクリックして Moodle のトップ画面に飛びましょう。特に、何かを書き込んだり設定を変更したりした場合は、ブラウザの「戻る」は使わないほうが安全です。

トップ画面の下のほうにある「コースカテゴリ」から適当なものを選んでクリックします。この下のほうに「新しいコースを追加する」ボタンがありますので、クリックします。「コース設定を編集する」ページが出ますので、少なくとも「*」の付いた必須項目を埋めてください。

長いコース名：科目名(またはそれに類するもの)を入れます。学務で管理している科目名と一致する必要はありません。同じ名前の授業がいくつもある場合は、「情報科学基礎(奥村)」のように担当教員名などを付け加えるとわかりやすいでしょう。

コース省略名：他と重ならない短縮名を半角英数で入れてください。すでに使われている名前を入れると再入力を求められます。例えば Phys01 や JKK2014 のようなものが考えられます。

コースカテゴリ：学部・学科などをメニューから選びます。「ごみ箱」にすると、管理人が定期的に削除します。

可視性：「非表示」にするとコースに入れなくなります。

開講日：最初の授業の日を入れます。

コース ID ナンバー：空欄のままかまいません。

コース概要：空欄またはコースの説明を入れます。

コースフォーマット：週ごとの授業で使うなら「フォーマット」を「ウィークリーフォーマット」にし、「セクション数」を授業週の数にします。掲示板(フォーラム)しか使わない場合は「ソーシャルフォーマット」、それ以外は「トピックフォーマット」がいいでしょう。

ゲストアクセス：ゲストアクセスを許可すると、アカウントのない人でもコースに入れるようになります。開かれたコース(OCW)の場合に使えそうです。ただし、ゲストではフォーラムに書き込んだり課題を提出したりできません。

これで、ページ下の「変更を保存する」をクリックすると、コースができあがります。コースの設定は、左側の「管理」→「コース管理」→「設定を編集する」でいつでも変更できます。

コースができたら、学生(一般に、参加者)に入ってもらいましょう。これには二つの方法があります。

自己登録：コースには学生が自由に登録できます(他の先生も自由に登録できますが、コースの中ではコース作成者以外は「学生」の権限になります)。無関係な人が自己登録してほしくない場合には、コースの左側の「管理」→「コース管理」→「ユーザ」→「登録方法」→「自己登録(学生)」で「登録キー」(登録時に必要なパスワード)を設定し、他の箇所はそのまま、下の「変更を保存する」をクリックします。初回の授業で受講生に「登録キー」を教えて、コースに入ってもらいます。

手動登録：コースの左側の「管理」→「コース管理」→「ユーザ」→「登録ユーザ」→「ユーザを登録する」で、まず「ロールを割り当てる」でコース内の役割(「教師」または「学生」)を設定して、該当ユーザを検索して見つけ、「登録」をクリックします。

(4)一斉連絡に使おう

受講生全員に連絡したいが、メーリングリストは設定が面倒——そんなとき、Moodleのコースの「ニュースフォーラム」を使いましょう。「トピックを追加する」ボタンで書き込みます。書き込んだら「フォーラムに投稿する」ボタンを押せば、フォーラム(掲示板)に書き込まれ、数十分後にメールが登録者全員に送られます。急ぐ場合は「すぐにメールを送信する」にチェックを付けておきます。

「ニュースフォーラム」は先生しか書き込めません。学生も書き込めるようにするためには、一般の「フォーラム」を作りましょう。

(5)新しいフォーラムを作ろう

Moodleの強みは、学生参加型のメニューが豊富なことです。

特に便利なのは、「フォーラム」(掲示板)です。学生のレポート等をフォーラムに書き込むように指示しておけば、先生だけでなく他の学生もコメントを付けることができますし、先生が点数を付けたり、設定次第では仲間の学生が点数を付けたり(ピアレビュー)することもできます。各学生や先生は、その学生がそのコースでフォーラムに書き込んだ全内容を通して見ることができますので、ポートフォリオとしても活用できます。

フォーラムを作るには、コースに入って、右上の「編集モードの開始」ボタンをクリックしてください。「活動またはリソースを追加する」というリンクがあちこちにありますので、フォーラムを作りたい場所の「活動またはリソースを追加する」をクリックし、「フォーラム」を選んで「追加」ボタンをクリックし、「フォーラム名」と「説明」を記入します。もし評価を付けたいなら、「評価」をクリックし、「総計タイプ」を適当なもの(例えば「評価平均」)にします。その下の「評価尺度」には満点の値(例えば「10」)を設定します。最後に「保存して表示する」または「保存してコースに戻る」をクリックします。

これだけでは先生にしか評価できません。学生同士に相互評価(ピアレビュー)させるには、そのフォーラムを表示している状態で、左側の「管理」→「パーミッション」で一番上を「学生」にし、「投稿を評価する」を「許可」にして「変更を保存する」をクリックします。

フォーラムへの投稿は「ディスカッショントピックを追加する」ボタンで行います。次からの投稿は、既存の投稿に「返信」することも可能です。フォーラムに書き込んだ内容が全員にメールで送られるかどうかは、設定次第です。フォーラムの設定の画面で「講読およびトラッキング」の「講読」の種類を選んでいただければ、好きなように設定できます。各選択肢の詳しい意味はヘルプ(「？」ボタン)で調べられます。

(6)ほかにもできること

ほかにも「活動またはリソースを追加する」の中の適当な項目を選んでいただければ、いろいろなことができます。ヘルプも充実していますので、ぜひいろいろ使ってみてください。おわかりにならないことがあれば、Moodleサポートチームまでお気軽にご質問ください(moodle-support@ml.mie-u.ac.jp)。

2. 三重大学 e ポートフォリオ

三重大学 e ポートフォリオは、三重大学の教育目標である「4つの力」の習得を支援するシステムとして、2009年4月に開発が開始されました。2009年4月は、三重大学が初年次教育科目「4つのカスタートアップセミナー」を他大学に先駆けて全学規模で開始した年です。e ポートフォリオは、この初年次教育プログラムを象徴する教育システムの一つとして、開発から1年後の2010年4月に全学に向けて運用が開始されました。

三重大学 e ポートフォリオの特徴は、以下の3つです。

- (1) Be Proactive (主体的に利用する)
- (2) 1 Up / 1 Day (毎日記録する)
- (3) Reflection and Next Action (振り返りをして次の行動へつなげる)

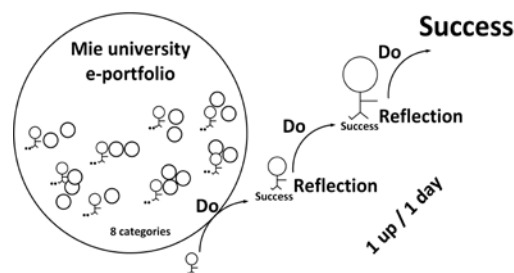


図 11 1up / 1day と振り返りで成長する

最初の特徴“Be Proactive”は、学生が主体的に利用するシステムであるという点です。e ポートフォリオを開発するに当たって最も重要視した点は、学生には記録を強制せず、学生の記録を教員は許可なく閲覧できないシステムにしました。e ポートフォリオに記録することが学生にとってノルマにならないように配慮し、また、誰にも邪魔されない場所を提供することによって、学生は、よそ行きの言葉ではなく本音で書くことができます。記録された活動数は、ニコニコマークの数として表示され、1週間の活動が少ないユーザーにはシステム上のニコニコマークから励ましのメッセージが送られます。利用する時間帯や月によって表示されるメッセージが変化し、活動が多い上位5名のユーザーが紹介されるなど、学生がe ポートフォリオにログインする度に新たな活動を始めたいと思わせるようなメッセージがシステム側から提供されます。

2番目の特徴“1 Up / 1 Day”は、毎日使うシステムであるという点です。また、3番目の特徴“Reflection and Next Action”は、e ポートフォリオに活動を記録する行為がリフレクションにつながり、さらには次の行動を発見させるトリガーとして機能するシステムであるという点です。これらのシステムを実現するために、時間管理手法の一つであるGTD(Getting Things Done)が推奨する5つステップ(収集, 処理, 整理, レビュー, 実施)をe ポートフォリオ上で踏めるようにしました。学生の活動はプロジェクト毎にまとめ、8つの活動カテゴリ(授業活動, 日課活動, 資格取得・スキルアップ活動, ボランティア・学生委員会活動, クラブ・サークル活動, 読書・趣味活動, ウェブページ活動, その他・未分類)に分類します。本システム上では、個々のプロジェクトを“ポートフォリオ”と呼

び、プロジェクト毎の活動を"タスク"と呼びます。記録された活動は、カレンダーやガントチャート上にも展開されるため、時間軸を使って振り返ることもできます。さらに、自分の活動を友人や先輩、あるいは教員との間で相互にレビューし合うこともできます。

三重大学 e ポートフォリオは、「あれもこれもしなければと思って何もできない」学生のモヤモヤした頭の中を、GTD というフィルタで濁りを濾過し、学生自身に、「今日何をするのか」、「明日何をするのか」、「今何をして次に何をするのか」といったその日の目標を決める機会を提供します。

三重大学 e ポートフォリオの画面は、(1) Top, (2) My Portfolios, (3) My Calendar, (4) My Reflections, (5) My Library, (6) My Web, (7) My Peers, (8) My Profile, の 8 つのタブで構成されています(図 10)。特に、ログイン直後に表示される Top ページは、三重大学 e ポートフォリオの 3 つの特徴を表現したページであり、画面の右側には、ユーザーに向けて励ましのメッセージを表示するニコニコマークがあり、その下には、1 週間の登録状況が表示され、さらに、画面の下部には、活動を記録した件数が多い上位 5 名のユーザーと自分自身の活動の内訳が並んで表示されます。

より詳しい説明ならびに操作方法については、三重大学 Moodle のトップページに紹介されている e ポートフォリオ解説サイトをご覧ください。最後に、本システムが多くの三重大学生に利用され、学生の皆様の成長に少しでも寄与できることを期待しております。

問い合わせ先

三重大学 e ポートフォリオヘルプデスク support@eportfolio.mie-u.ac.jp

三重大学 e ポートフォリオ <https://eportfolio.mie-u.ac.jp/>

ニックネーム	授業系 数	日課系 数	資格取得・スキルアップ 数	実用メディア・学生委員会 活動数	クラブ・サークル 活動数	読書・趣味系 数	Webページ系 数	その他・未分 類	タスク総 数	達成件 数
ニックネームなし	10	0	0	0	0	0	0	0	10	0
T・M	0	0	0	0	0	0	0	8	8	0
ニックネームなし	0	0	7	0	0	0	0	7	7	7
ニックネームなし	0	0	0	0	0	0	0	7	7	0
ニックネームなし	0	0	0	0	0	0	0	5	5	0
あなたの活動	0	2	1	0	0	0	0	1	4	0
あなたの活動 (累計)	155	754	177	4	1	18	18	170	1297	58

図 12 三重大学 e ポートフォリオの画面

『三重大学新任教育ハンドブック「4つの力」教育への招待ー』

【監修】

田中晶善 三重大学理事・副学長 高等教育創造開発センター長

【編集】

三重大学高等教育創造開発センター教育開発部門

中川 正	人文学部
山田康彦	教育学部
下村 勉	教育学部
竹内佐智恵	医学部
加藤彰一	工学部
高山 進	生物資源学部
川島一晃	学生総合支援センター

【執筆】

三重大学高等教育創造開発センター

中川 正	人文学部	教育開発部門
山田康彦	教育学部	教育開発部門
中西良文	教育学部	教育評価部門
奥村晴彦	教育学部	教育情報システム部門
高山 進	生物資源学部	教育開発部門
森尾吉成	生物資源学部	教育情報システム部門
守山紗弥加	教養教育機構	全学教育部門
下村 智子	教養教育機構	全学教育部門
長濱文与	教養教育機構	全学教育部門
南 学	教養教育機構	教育評価部門
中島 誠	教養教育機構	教育評価部門

三重大学学生総合支援センター

鈴木英一郎 学生なんでも相談室

三重大学新任教員ハンドブック
ー「4つの力」教育への招待ー

2014年9月発行

制作・発行 三重大学高等教育創造開発センター

〒514-8507 三重県津市栗真町屋町 1577

TEL 059-231-5615

URL <http://www.hedc.mie-u.ac.jp>